



NEWS LETTER かながわ

2015年度第2号(通巻第18号)

2016年2月 神奈川支部 発行

連絡先 e-mail:jacdpkanagawa@gmail.com

巻頭言

神奈川支部副支部長 蘭牟田洋美

神奈川県は健康寿命日本一にという取り組みを掲げています。健康寿命とは健康上の問題で日常生活が制限されることなく生活できる期間のことで、平均寿命から日常生活が制限される期間を引いた期間のことです。ちなみに、神奈川県は健康寿命は男性 70.9 歳（全国 12 位）、女性 74.36 歳（全国 13 位）です。男女ともあと 1 歳健康寿命の延伸を図ることができれば「日本一」が見えてくるそうです。

確かに、健康寿命の延伸の追求は数値目標もあり、インパクト充分です。地域に 8 割いる生活自立の高齢者には励みになる時もあるでしょう。一方で、毎日のように報道される 80 歳でエベレスト登頂成功、90 歳でフルマラソン完走などのエイジレスな高齢者像に自分とは別世界とを感じる高齢者も少なくはありません。健康寿命という生活自立が社会における望ましい生きかたというメッセージは高齢者にどのように届くのでしょうか。

都市部在住の男性高齢者は、現年齢が平均寿命に達したから、死に支度をすると言ひ、自室から出なくなりました。毎年国から発表される平均寿命が人生の危機のきっかけとなることを教えられました。ある高齢者は寝たきりでも、毎日車で家族が散歩に連れて行ってくれるので、幸せだと教えてくれました。

高齢期は個人差のもっとも大きな時期です。健康か病気かの境はあいまいで、一病息災が当たり前です。病気もなく健康な人よりも、一つぐらい持病があるほうが健康に気を配り、かえって長生きするという事です。

健康寿命日本一は一つの例です。元気な政治家が元気な高齢者宛に作成した目標がわが国には多い気がします。私の杞憂でしょうか。支援を必要とされている方の生涯発達の観点に立った心の伴奏者となるため、神奈川県支部では意見交換やスキルアップができる居場所でありたいと考えております。

最後になりましたが、支部の皆様にとってこの一年の活動が一層充実したものでありますよう祈念致します。



神奈川支部研修会報告

2015年12月20日（日）に、第2回資格更新研修会をウィリング横浜において実施しました。

<午前部>

講演会では、次のテーマで講師の先生をお招きし、お話をうかがいました。

講演

テーマ：臨床家を知っておきたい DSM-5

講師：市川宏伸氏

東京都小児総合医療センター顧問、日本発達障害ネットワーク理事長
日本自閉症スペクトラム学会会長 他

2015年6月に日本語版が発表された DSM-5 について、今回は神経発達症群/障害群の部分を中心にお話いただきました。神経発達症群/障害群は、DSM-5 から導入された新しいカテゴリーです。知的能力障害群、自閉スペクトラム症/自閉症スペクトラム障害、限局性学習症/障害、注意欠如・多動症/障害などが含まれています。それぞれの疾患について、改定の際の変更点や新しく加わった内容について詳しくお話いただきました。また、先生が実際に臨床現場で使われている評価尺度についてご紹介いただき、クリニックで使用する評価尺度に求められることとして、①感度特異度ともに高いもの、②短い時間でできるもの、③安価であること、④標準化されていること、⑤著作権が明確なものという5つの要素が重要であると整理していただきました。講義前半の最後には、自閉スペクトラム症/自閉症スペクトラム障害と鑑別の難しいコミュニケーション症群/障害群や、併存することの多い運動症群/障害群についてもご紹介いただきました。

講義後半では、会場からの質問にお答えいただき、その後、成人期の事例についても何例かご紹介いただきました。高い知的能力を持つ事例や家庭を持つ事例をご紹介いただきましたが、知的能力だけでは支援の必要性を測ることができないことや、本人の支援のためには家族の協力が不可欠であることを再確認しました。

先生の豊富な臨床経験から事例や歴史背景を交えて詳しく解説いただき、DSM-5 のポイントや課題点について整理することができました。また、同時に評価についてもお話いただいたことで、新しい診断基準に即した今後の評価方法について考える機会にもなり、有意義な研修会となりました。
(文責：須田恭平)

講演会の様子



市川宏伸氏



<午後の部>

午後は分科会形式で、4つのテーマ別に実践報告をもとにした意見交換を行いました。

分科会 A)

テーマ：乳幼児期「感覚統合訓練と感覚運動発達」～ワークショップ

話題提供：トート・ガーボル氏（相模女子大学）

28名の参加がありました。発達障害幼児に対して、発達論的アプローチに基づく感覚運動発達の支援について、実際に身体を動かして体験することも含めた研修でした。

午前中の講義で、市川宏伸先生にお話いただいた DSM-5 についても触れながら感覚処理障害（sensory processing disorder：SPD）についての説明もありました。自閉症スペクトラム（ASD）の4人中3人に重度の感覚処理障害があるそうで、本質的な ASD の特徴ではないものの、自閉症スペクトラムの新しい診断基準には“unusual sensory behaviors”として感覚情報処理過程に関連した項目が挙げられており、その診断的な意義も認められてきているそうです。

このような学術的な話と共に、例えば、乳幼児に関わる際の前庭刺激指導の留意点として、これまで経験したことのある刺激や姿勢から指導を始めること、刺激を与える順序としては、揺れから直線加速へ、上下→前後→左右の動きで、受動から能動へ等の動きを示しながらのお話があり、あっという間に講義が終了となりました。（文責：小林倫代）

分科会 A)の様子



トート・ガーボル氏



分科会 B)

テーマ：児童期「小学校特別支援学級等における接続期の取り組み」

話題提供：佐藤朋実氏（横浜市立並木第四小学校）

20人の参加者がありました。参加者の自己紹介の後、小学校での接続期の取り組みについて話題提供を受け、質問や活発な意見交換ができました。引き継ぎを受ける立場の中学校と引き継ぎをする立場の療育センターで勤務されている方からも報告や課題の話題提供がありました。また、支援が必要な児童の情報を収集し管理保護していく体制の整備や関係機関を交えたケース会議の開催等、学校現場での努力も報告されました。最終的に、お子さんの情報が、成長に伴い支援先が変化しても継続的に伝えられていくような仕組みがあるといいという話題になり、お子さんの情報を相談支援ファイルで継続的に伝達していく先駆的な取り組みの情報提供もありました。小学校は通常級、特別支援学級ともに、年齢も状態像も多様なお子さんたちに支援していく場所です。現場の先生方とお子さんや保護者の方の両方に効果的な取り組みをこれからも継続的に考えていくことが必要と感じました。（文責：尾崎浩子）

分科会 B)の様子



佐藤朋実氏



分科会 C)

テーマ：学齢期～青年期「特別支援学校高等部の進路支援」

話題提供：由谷るみ子氏(神奈川県立座間養護学校)

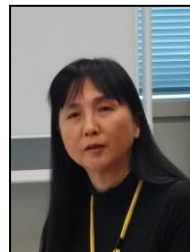
10名の参加がありました。自己紹介後、分教室も2つ抱える座間養護学校高等部の進路支援について話題提供がありました。「座間養護学校のキャリア教育について、学年ごとの進路指導の重点、日常的な取り組み、校内実習・現場実習と進路決定までの流れ等の実践内容」が写真や資料を使い、わかりやすく話題提供されたので、その後の意見交換が活発に行われました。参加者の特例子会社の方から、制度の説明や卒後の受け手側から感じる学校や家庭に必要な視点、離職を防ぐ条件等の話題も関連して提供され、議論が深まりました。また、「座間養護学校のような実践がどの特別支援学校でも行われるよう教員を育てるシステムが必要」といった意見も出されました。就学前療育機関・医療機関・SC・放課後等デイサービス・特別支援学校・特例子会社といった参加者の皆さんで卒後の自立に向けた縦断的な継続支援・横断的な連携による支援という観点からも有意義な意見交換をすることができました。

(文責：橋爪美津子)

分科会 C)の様子



由谷るみ子氏



分科会 D)

テーマ：成人期以降「ライフ・レビューを活用した高齢者支援」

話題提供：蘭牟田洋美氏(首都大学東京)

12名の参加がありました。高齢者へのライフレビューを活用した支援では、閉じこもり高齢者を例にお話がありました。閉じこもりは外出頻度で測定される生活様式であり、認知症や要介護状態のリスクであること、外出への自己効力感が低いことと家族と同居の場合に閉じこもりは多いことがわかりました。何よりも、閉じこもらないという知識が大切であるとのお話でした。ライフレビューは、自分の人生を振り返り、評価してもらう心理療法であり、これを活用した訪問プログラムでは、本人だけでなく家族も変わってくるなど、事例を通してお話いただきました。また、この療法はその後の高齢者の生活の改善に繋がるものであるとのことでした。話し合いでは、家族など身近な問題であり、とても有意義な時間であったとの感想や、家族の対応についての質問が出ました。余裕のない時に聞くふりをしないこと、感謝を示すことの大切さ等、また閉じこもり世代の孫世代がキーパーソンになることがあるとのお話を伺いました。

(文責：矢島友子)

分科会 D)の様子



蘭牟田洋美氏



神奈川支部研修会についてのアンケート結果

参加人数：97人、アンケート回収率：68%

1. 午前の研修（講演）について

講演会：「臨床家が知っておきたいDSM-5」 講師：市川宏伸氏

<ご意見・ご感想> ※一部抜粋

- ・ DSM-5 になっての変更点など理解しやすく、歴史的な背景なども教えていただき勉強になりました。
- ・ 事例を交えたお話で、具体的な対応や障害像のイメージが持ちやすく、実際の臨床像をどう捉えるかについての視点が整理されました。
- ・ 経験豊かな臨床家である先生のお話は、深みや根拠が明確でとても勉強になりました。再度、先生のお話をお聞きしたいと思いました。
- ・ 医療職の「視点」を理解でき、教育活動の中でどう活かすかを考えさせられました。
- ・ 最後の「見方が変わっただけで利用者が変わるわけではない」という言葉が印象に残りました。診断名がなんであれ、特性をもった人にどう対応すればよいのかが大切と改めて感じました。
- ・ 診断基準が変わったとしても治療や支援の方法には、本人の QOL 向上の観点が大切なことがよくわかりました。

2. 午後の分科会について

分科会：支部会員による実践報告とそれに基づく意見交換

<ご意見・ご感想> ※一部抜粋

分科会 A) 幼児期

- ・ 身体感覚の基礎とその後の学習や社会性発達のつながりについて学びました。
- ・ ワーク形式で楽しく学びました。子どもの感覚を体感できたのは発見でした。

分科会 B) 児童期

- ・ 引き継ぎ、連携がテーマでしたが、日々悩んでいる身としてはとても励みになりました。
- ・ 学校現場を知れ、また様々な職種の方から意見をきくことができよかったです。

分科会 C) 学齢期～青年期

- ・ 人材育成やシステムの構築など、中核的な見過ごせない問題についての話題があり、とても考えさせられました。
- ・ 具体的な実践が参考になりました。貴重な情報も得られ、自分の現場でも活かしたいと思います。

分科会 D) 成人期以降

- ・ ライフビューの効果を知ることができ参考になりました。さらに高齢者支援について学んでみたいです。
- ・ 職場における、業務上の相談や自分の親のことまで思いを巡らせる機会となりました。

アンケート係より

運営について「案内をもう少し早くほしい」「会場の案内がわかりにくかった」などの意見をいただきました。また今後の研修会の希望テーマについても様々な意見をいただきました。研修会の企画・運営に活かしたいと思います。ご協力ありがとうございました。

(文責：白馬智美)



■ 神奈川支部 2016 年度第 1 回研修会・総会の予定

○日時：2016 年 6 月 12 日（日）10：00～16：30（1.5 ポイント）

○会 場：ユニコムプラザさがみはら

○講演会：「障がいのある子どもとその家族への支援のあり方」（10：00～13：00）

・講師…星山麻木(明星大学)

○神奈川支部総会：14：00～14：45

○分科会：4 テーマ程度（15：00～16：30）

※ 詳細が決まりましたら神奈川支部ホームページ、SOLTI、郵送（神奈川支部会員のみ）にて、お知らせいたします。

■ 神奈川支部メールアドレスについて



<編集後記>

新しい年を迎えましたが、皆様いかがお過ごしでしょうか。今回のニューズレターは、昨年 12 月の第 2 回研修会のご報告でしたが、いかがでしたでしょうか。新役員のみで実施した初めての研修会でしたが、午前中の研修会、午後の分科会、ともに大変有意義なものとなりました。そのご報告ができたこと、広報担当として大変うれしく思います。

また、今回のニューズレターにお気づきの点、ご意見・ご感想等ございましたら、今後のニューズレター充実のために生かしていきたいと思ひますので、上記のアドレスにご連絡いただけますよう、お願いいたします。

まだまだ寒い日が続きますが、皆様ご自愛ください。

（広報担当 橋爪美津子・佐藤朋実）